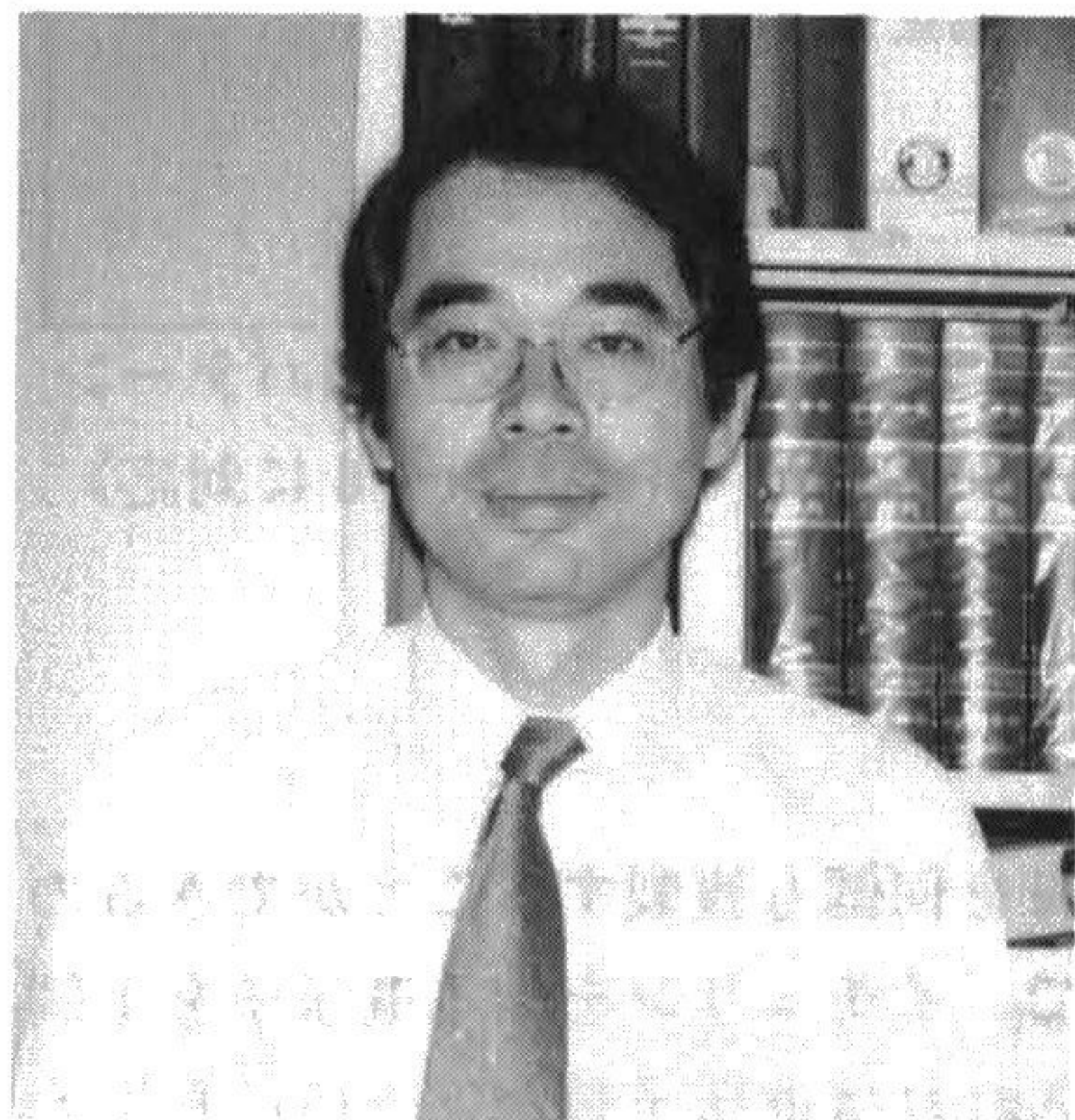




常識に対する自覚的な批判

——桑子研究室～人文社会群——



桑子 敏雄 助教授

私たちの東京工業大学には、明治の昔から、さまざまな専門分野で最先端の研究をされている先生方が大勢おられる。研究のみならず教育の面においても、学生実験のレベルの高さや設備の充実等で高い評価を得てきた。しかし、人文社会科学系の一般教育に属する分野にも、非常に素晴らしい先生方がいらっしゃるのをご存知でしょうか。

ランドフォールでも自分の専攻・専門以外には目の向きにくい傾向の

ある学生のために「東工大にも、こんなすごい先生が……」ということをこれまでも紹介してきた。社会科学や語学系の研究室には、専門研究に比較的近い立場にあるため、いろいろな先生を訪問取材させていただいたが、人文科学系の研究室には取材をさせていただく機会がなかった。そこで今回は、人文科学のなかでもとりつきにくいと思われる哲学を研究されている桑子先生にお話を伺った。



哲学という学問の定義

皆さんは、哲学とはどのような学問か、と質問されたらどう答えるだろうか。「森羅万象の本質を見極める学問だ」という方がいるかもしれない。「自己の意識はどこからくるのか」

「自己認識はどのようになされるのか」といった問題を追求するのだ、と考える方もいるだろう。あるいは、「いや、宇宙の真理を見いだす方法だ」と反論される方もあるに違いない。哲学に対するイメージは三者三様、様々な答えが予想されるが、こ

こで確かに言えることは、これらの答えは少なくとも間違っていないということである。

では、間違っていないのに答えが一つに決まらないのは一体なぜだろうか。それは、哲学という学問の性格にも起因するが、ひとつには、「哲学」という学問の名前そのもののうちに明確な定義が含まれていないからである。先生ご自身は哲学を「常識に対する自覚的な批判」と考えておられるようだ。



日常性に批判の目を向ける

読者の方々には、人間や人間の生きている世界や生・死について真剣に考えたことのある方が少なからずいると思う。世界のあり方や人間の意識を考えていくうえで、ひとつ気がつくことがあるはずである。それは、私たちの考えが過去に受けた教

育や生活してきた環境に大きく左右されているということ、しかもそれが明確に意識化されずにいるということである。

「我々は既成の与えられた知識体系の中で常識を形成しているわけです。たとえば、人間観・自然観・世

界観・宇宙観あるいは倫理観などで
すね。そういう〇〇観を自覚化する
ときに用いる一般的な概念をあらた
めて説明しろと言われてもうまくで
きないんですね。つまり、分かって
いるつもりになって使っている言葉
はかえって説明が難しい。それを説
明しようとする、難しい概念を使
わざるを得ないんです。それはちょ
うど『笑う』という言葉の説明しろ
と言われたときに、国語辞典に『よ
ろこびやおかしさなどの心情を声ま
たは顔の表情で表出すること』とあ
るように『笑う』よりも難しい『心
情』『表情』『表出』などの言葉を使
わざるを得ないようなものです。哲

学が対象とするのはそういう説明の
難しい概念なんです。また説明に使
う概念もしばしば難しい概念になり
がちなんですね。しかしいずれにせ
よ、哲学とは我々の常識を作ってい
る基本的な概念、しかもその意味が
自覚的に問われることの少ないもの
を意識化し、自覚的に批判していく
プロセスそのものであると思います。」

ものを考えて行く上でなによりも
大切なことは、自分自身の中にある
さまざまな概念——それらには矛盾
するもの同士が混在しているかも知
れない——をしっかりと自覚してい
くということなのだそう。



疑問点はどこにでもある！

これまでは主に、哲学とは何か、
そして哲学的問題へのアプローチの
姿勢と言うものについて先生独自の
見解を伺ってきた。では具体的な問
題はどのように見つけていけばよい
のだろうか。

例えば、よくニュースの話題とし
て取り上げられるものに、臓器移植
と生命倫理の問題がある。日本人に
は日本人特有の自然観・死生観とい
うものがあって、欧米人に比べて、
脳死判定のみで臓器移植をしたくな
いと考えている人が多いという。

ここで今、外国の人からなぜもっ
と積極的に臓器移植をしないのか、
という質問を受けたとしよう。「日本
人固有の死生観があるからです」な
どと答えても理解が得られるわけ
ではない。十分説得力のある解答を示
すためには、まず私たちは、私たち
が普段使っている「生きる」「死ぬ」
というような言葉の意味を十分明確
にしなければならない。ところがこ
ういった言葉は、我々が生まれてか
ら成長していくときどっぴりつかっ
ている文化的背景のなかで習得して

きたものであり、その明確な意味を
意識することなく身につけてしまっ
たものなのだ。だから、まず自分た
ち自身がこうした言葉の意味につい
て、その背景にある文化との関係を
説明できなければならないし、その
上で説得力のある生と死についての
考え方を示さなければならない。

脳死と臓器移植について、先生ご
自身は「どこまでが生でどこからが
死かはもはや自然科学的な探求の対
象ではない。それは『生きている』
という言葉と『死んだ』という言葉
をどのような意味で用いるかという
人間の取り決めの問題なのだ」と考
えておられるということであった。

また、言語・言葉もしばしば哲学
の対象となる。

我々は日常生活で言葉を使って会
話や議論をしている。それでお互い
に相手のことを分かり合っているつ
もりでいる。しかし、中には他人が
自分を理解してくれないと思いこん
で、自閉気味になる人がいることも
事実である。そうすると、人間同志
が理解し合うというのは一体どうい



うことかという問題が提起される。言葉で理解する能力はしばしば理性と言われるから、これは「理性とは何か」という問題になる。また最近話題になるのは、異文化同士の意志疎通はそもそもどうやれば可能なかという問題である。人間が理性的な存在であるならば、異文化同士の意志疎通はできるはずだという考え方もあるし、それとは逆に、異文化間のコミュニケーションは原理的に不可能であるということを理由に人間の理性そのものに疑問を向ける立場も可能である。

「倫理・政治・芸術・宗教・歴史などなんでも哲学の対象になるんです。例えば政治でも、政治を論じるときの重要な概念、例えば、支配とか正義とか、そういった概念について研究する。つまり、何でも哲学に

なるんですよ。だから哲学者によって研究していることが極端に違っていたり、問題へのアプローチの方法が異なることがあるわけです。このことが分らないと、哲学はとても近づきにくく難しいものに見えるわけです。」

先生は特に決まったテーマを一つだけ追求するということではなく、いくつかの興味を持たれていることを広く研究しようとされているそうである。理科系の専門大学に所属していることで、自由に活動できることを喜んでおられた。

最近関心を持っていらっしゃるのには「価値」と「行為」の問題だということである。また、「感情」についても、その構造や理性との差異などをどう考えたらよいか、ということについても考えたいと言われた。



他人と自分の違いを大切に

最後に、東工大生についてお話を伺った。かなり手厳しいお話をして下さったが、非常に考えさせられたのでここに載せたい。

「真面目すぎて、『笑い』が少ないんじゃないかと思います。東工大に入って来る人があまり人生に迷ってこなかったということがあるかも知れませんね。それに、カリキュラムが決定されていて、かなりきついんじゃないですか。勉強が忙しくて人生を考える時間がないんじゃないでしょうか。」

多くの学生は真面目そのものですが、他人が考えないようなことに無上の喜びを見いだすような学生もい

ないではありません。そういう学生にこれまで何人か出会いました。こういう人は、真面目な人たちから見ると不真面目に見えたりするんですね。しかし、そんな友達がいたら大切にしてほしいですね。

皆優秀だから線路の上に乗って行けばそれなりにいい仕事をすると思います。皆と同じ方向を向いて優れた仕事をする人はきちんと評価されていくと思います。だけど、そうでない人、皆と違った方向で考える人、そういう人を評価できる余裕を皆が持つことも必要ですし、そういう人が孤独に陥らないような環境も欲しいですね。」

多忙の折、わざわざ取材に応じて頂いた桑子先生に感謝の意を表してここに筆を置きたい。

(木下)

